

第3章 貴族政治と国風文化 1. 摂関政治 b. 摂関政治

① 摂関政治 = [1 藤原北家] 出身の摂政・関白が政権の中核にあった時代の政治
(10世紀後半～11世紀)

摂政は天皇が[2 幼少]の期間にその政務を代行し、関白は天皇の成人後に、その[3 後見]役として政治を補佐する地位である。摂政・関白が引き続いて任命され、政権の最高の座にあった10世紀後半から11世紀ころの政治を[4 摂関政治]とよび、摂政・関白を出す家柄を[5 摂関家]といった。

② 全盛期…藤原[6 道長], [7 頼通]父子(11世紀)

道長の歌 「此の世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることも無しと思へば」
道長 = [8 法成]寺、頼通 = [9 平等]院を建てる

② 摂関政治のメカニズム…自分の娘を天皇家に嫁がせ、[10 外祖父]として天皇を後見、11 天皇の權威を用い権力を行使。天皇が[12 太政官]を通じて全国を支配する形式は変わらない。

[13 太政官]の会議で審議→([14 関白]らが内覧)→天皇(幼い時は[15 摂政]が代理)が決裁
※特に重要なときは[16 障定]で →太政官符や宣旨などで命令・伝達

17 女子を生むことができなかった 頼通はしだいに権力を失っていく

摂政・関白 = [18 人事] 権に深くかかわる←中級・下級の貴族を隷属させる

実際の政治は[19 先例]・儀式を重視(宮中では[20 年中行事]が発達)。形式的で変化に乏しい。
→貴族たちは個人的な栄達のみを求め、国政には興味を持たず、行政への責任感に欠ける

摂政・関白は、もっとも身近な[21 外戚](母方の親戚)として天皇に近づき、伝統的な天皇の高い權威を利用して、大きな権力をにぎったのである。とくに摂政・関白は[22 人事]に深くかかわっていたため、中・下級の貴族たちは摂関家やこれと結ぶ上級貴族に隷属するようになり、やがて昇進の順序や限度は、家柄や[23 外戚]関係によってほぼ決まってしまうようになった。そのなかで中・下級の貴族は、摂関家などにとり入り、経済的に有利な地位となっていた[24 国司]になることを求めた。

c. 国際関係の変化

① 10世紀 東アジアの大変動期
[25 唐]世界帝国の滅亡→東アジア世界の秩序の崩壊→諸民族の政治的・文化的自立進む
・中国…907[26 唐]滅亡→五代十国時代→960[27 宋]の成立
・中国東北部…906 [28 渤海]の滅亡→[29 遼]の成立・契丹文字など
・朝鮮半島…918[30 高麗]の建国→935[31 新羅]を滅ぼし、朝鮮を統一

② 894[32 遣唐使]の廃止→以後、日本は外交面で[33 消極]的姿勢をとる
→他国との[34 国交]をもたなくなる。

③ 9世紀以降、中国・朝鮮からの[35 私商船]の来航→実質的な交易・交流は[36 活発]

④ 1019 [37 刀伊の入寇] = 女真人、九州北部を攻撃、[38 藤原隆家]率いる太宰府軍が撃退

2. 国風文化 a. 国文学の発展

① [39 遣唐使]の廃止などにより[40 大陸文化]の消化・吸収がすすむ = [41 国風]文化成立

国風文化の特徴…[42 貴族]社会を中心に、日本の風土や日本人の人情・嗜好にかなった[43 優雅で洗練された]文化

② 文字の「国風」化…かな文字([44 ひらがな][45 かたかな])の使用

③ [46 神仏習合]の進展と、[47 浄土]教思想(←[48 末法]思想)

b. 国文学の発達

① かな文字の使用→日本人特有の[49 感情や感覚]を生き生きと伝えられる→国文学が発展。

[50 女流作家]の活躍 = 摂関家の[51 外戚]政策が背景 = 才能のある女性を[52 宮廷]に採用

② 和歌の発展 = 「53 古今和歌集」の編集(编者[54 紀貫之]ら)
勅撰和歌集として(平安初期は勅撰[55 漢詩文]集)
→以後、鎌倉期まで8冊の勅撰和歌集([56 八代集])編さん

「古今風」…57 繊細で技巧的な作風 (「万葉風」…58 素朴で力強い作風)

※勅撰とは[59 天皇]の命令(「勅」)によって編集されるという意味

③ 物語文学…[60 竹取物語](伝説が題材)、[61 伊勢物語](歌物語)、「宇津保物語」「落窪物語」
[62 源氏物語](世界最古の長編小説、[63 光源氏]ら主人公、作者[64 紫式部])

随筆 = [65 枕草子](清少納言)…皇后定子の側近。宮廷の生活を描く

日記文学 = 紀貫之「66 土佐日記」…紀行文、最初のかな日記
藤原道綱の母「[67 蜻蛉日記]」…[68 一夫多妻]制における結婚生活との苦悩を描く
「紫式部日記」・「和泉式部日記」・菅原孝標の女「更級日記」